

宗教と文学¹

——遠藤周作の文学における宗教的視点——

長谷川（間瀬） 恵 美*

はじめに——宗教と文学

本日私に与えられましたテーマは「宗教と文学」ですがそこに、サブタイトルとして「遠藤周作の文学における宗教的視点」と付け加えていただきました。宗教とは、自分自身の実存の究極的な意義を問う時に、答えを示してくれる教えです。遠藤周作は、カトリック信徒でしたので、今日お話しさせていただく宗教とは、遠藤周作が拠って立つキリスト教的基盤です。その基盤について、私が感情移入的に解釈理解することで、宗教者としての遠藤を提示することを目的とします^[1]。

キリスト教的基盤について解釈するとは、遠藤周作が「日本的キリスト

* 南山宗教文化研究所非常勤研究員

1 本稿は、2008年10月28日に金城学院大学キリスト教文化研究所において行った研究発表を基に加筆したものであり、文体は口語調に統一した。また当日の質疑応答の内容も反映している。併せて本文末に当日用いたレジュメを掲載し、参照箇所を【 】付で本文中に示した。資料はページ数の関係で割愛した。

教」と理解し文学上で表現したものを、日本福音ルーテル教会の信徒である私が再解釈したキリスト教です。私にとって遠藤周作の文学を研究することは、作者の信仰に基づいた「体験的キリスト教」を私自身の実存的問題として解釈することであり、それによって日本人の信仰の本質を探ることを目的としています。それは私の研究テーマであります「日本におけるキリスト教の^{みしよつか}実生化」の問題でもあります^[1.1]。

さて、いかなる宗教においてもその宗教の教義（Dogma）は普遍的であると教えられます。しかし、宗教と人と文章が切り離すことができないものであるように、宗教的感情、宗教的感性は国によって文化によってまた時代によって異なります。また、神学は「神」についての学問であるといった時点から、ある種の包括性と普遍性を持つことも否めません。包括性とは「神」を唯一、絶対の真理として共有することが求められること、普遍性とは「神の愛」は生きとし生けるもの万物に注がれているということです。このように、一見矛盾する「神」という概念の包括性と普遍性がいかにして遠藤周作という個人において享受され文学において表現されたかを後に提示します。

まず最初に、遠藤周作の生い立ちとその時代の関係を考察します。そこから文学作品の背後に存在するその時代の人間観、人間の心の希求、その時代を超えて見据えられている人間の本質を典型化するものを見出すことができると思うからです。

遠藤周作（1923–1996）について^[2]

遠藤周作は、1923年3月27日に東京の巣鴨に生まれました。2歳年上の兄との2人兄弟です。母親はヴァイオリン科の出身、父親は安田銀行（現在の富士銀行）に勤務していました。父親の転勤で、遠藤は3歳の時に満州の大連に移りました。10歳の時に両親が離婚することになり帰国しま

す²。一時、母親の姉家族と同居をするため神戸市に移り六甲小学校を卒業します。その間、熱心なカトリック信者であった伯母に連れられて母親と兄とミサにあずかっていた。そして12歳の12月、母親を喜ばせるために無自覚なまま夙川カトリック教会で受洗します（母は1か月前の5月に受洗）。この瞬間から信仰受容の内的葛藤が始まります。遠藤はそれを「日本人としてキリスト教信徒であることが、ダブダブの西洋の洋服を着せられたように着苦しく、それを体に合うように調達することが自分の生涯の課題であった」³と特有の比喩で語っています。其の後、上智大学を経て慶応大学仏文科を卒業し終戦を迎えます。1949年、27歳の遠藤は終戦後初の日本人カトリック留学生として選出され、フランスの現代カトリック文学を勉強するためにマルセイユーズ号に乗り込みます⁴。そこで三雲夏生・昂兄弟、そしてカルメル会修道院で修行をめざす井上洋治と出会います。敗戦国民としてのリヨンでの留学体験は想像を絶するほど孤独なものだったようです。「家郷を離れ、……新しい環境のなかで、おどおどとし、自尊心を傷つけられ、劣等感に苦しんでいた」と遠藤は当時の体験を語っています⁵。西洋におけるキリスト教と自分自身のキリスト教信仰の距離感は深まり、人種差別に苦しみ、心身共にストレスを課し、2年後には体調を崩し、吐血。ジョルダン病院に入院後ついに1953年2年半の滞仏を終えて帰国を余儀なくされます。帰国後も1年間は体調が回復せず、31歳

2 遠藤自身が初めてこの体験を作品の中で語ったのは、結核が再発し入院した時である。遠藤周作文学全集（以下CSEL）vol. 7所収、「船を見に行こう」（1960）。

3 CSEL, vol. 12所収、「合わない洋服」（1967）参照。

4 山根道公『遠藤周作—その人生と「沈黙」の真実』（2005）118頁参照。しかし、私はネラン神父（遠藤の小説『おバカさん』のモデルとなった人物）ご自身から、遠藤の留学がネラン神父の個人的な資金援助により実現されたということを知っている。

5 CSEL, vol. 14所収、「私の愛した小説」（1983）18頁。

で初めての小説「アデンまで」を三田文学に発表し、「白い人」により芥川章を受賞したことから小説家への道を歩みますが、其の後も生涯、病気との戦いでした。

遠藤文学の宗教観に影響を与えた内的要素として、幼児期の異国生活、両親の離婚、キリスト教への無自覚なままの受洗、病床体験、留学、挫折、井上洋治神父との友情が挙げられます。外的要素としては、遠藤が22歳の時に日本が敗戦を迎えたこと、1960年に第二バチカン公会議が開催されたこと、そしてジョン・ヒック (John Hick) の提唱する「宗教多元主義」との出会いが挙げられます。前者は遠藤自身のアイデンティティーの問題として、後者は当時の日本の特殊事情とキリスト教の問題として、遠藤の文学活動に大きな影響を与えています。

私自身、海外生活で味わう劣等感、信仰受容の葛藤等、遠藤の体験を自身の経験と重ねてきました。両親から授かったキリスト教を日本人として、その文化の中で実生化すべく現在も奮闘しています。遠藤は文学者であって、福音の文化的解釈学を考えていなかったかもしれません。しかしながら私は一読者として、また神学・宗教を研究する者として、遠藤が文学においてイエス・キリストの新しいイメージを構築しようとしていたことを読み取り力づけられてきました。遠藤はキリスト教が日本文化、伝統、および日本人の生き方に根づくことができるように、キリスト教を再構築しようとしていたと考えています。また私はそれを遠藤の「神学的な挑戦」として解釈するのです。私に与えられた課題は、遠藤の神学的挑戦を継承し、伝統的な西洋の枠組みで構築されたキリスト教を脱構築し、日本の文化に実生化することです。

遠藤文学におけるキリスト教の実生化とその展開過程^[3]

遠藤文学におけるキリスト教の実生化を真に理解するために私は遠藤の

文学を次の3段階に分けて考察しました。

第Ⅰ段階（相剋）[1947-1965]：〈1945年終戦（敗戦）、1950-1953年留学〉

1947年から1965年にいたる第Ⅰ段階は、実生化における準備段階と見なすことができます。「神々と神と」は1947年に上智大学の「四季」第五号に提出されています。遠藤はこの作品において西洋のキリスト教的感覚は日本人にはどうしても理解することができないと主張し、日本と西洋の間の深い溝を指摘しました。日本人には西洋の「神」概念が理解できないという問題は、日本人でありキリスト教徒であろうとする遠藤にとって絶対に避けては通れない問いでした。遠藤は「われわれ（日本人）は多くの神（汎神論）の息子です」と述べています。この場合「汎神論」という言葉が標準的な用法に従っていないとはいえ⁶、この作品に始まる遠藤の作品の数々が日本人の感性に訴える「神」の解釈の必要性を考え始める準備段階となりました⁷。

1945年に日本は敗戦を迎えました。その前年に風邪をこじらせて肋膜炎をおこした遠藤は、徴兵されずに終戦を迎えています。同年代の人々が戦争で亡くなり、友人や知人が戦地から帰国すると、遠藤は生涯そのうし

6 遠藤の使用する「汎神論」とは、「東洋的汎神論」と考えられる。それは自然描写等において神の存在を感じることであり（汎神論的な描写）雪を美しいと感じることが同時に、聖い、清い、と感じることであり、その感情は罪の浄化につながる。さらにこれを神の恩寵と見ることが遠藤の「汎神論」という解釈である。

7 1941年（遠藤18歳）に「上智」第1号（1941年12月）に発表した論文「形而上学的神と宗教的神」が没後発見されている。その中で遠藤は、信仰としての神、内から啓示を開く神は、実感として訴えるものとして求められなければならないという。CSEL, vol. 14所収。

るめたさを持ち続けます⁸。また、期待と希望を持って出港したフランスでの海外留学はつらく厳しい経験であり、その結果としての病気、挫折、帰国は先に述べた通りです。

まとめ（相克）：第Ⅰ段階は与えられた宗教とそれを受容しようとするアイデンティティーの葛藤、つまりそれは西洋と日本、giver and receiverという相克の構図として示すことができます。また遠藤は、1963年に発表した「私とキリスト教」において、自分の信仰の問題として日本人的な感覚と基督教との矛盾を3つ記しています。：1. 神にたいする無感覚2. 罪にたいする無感覚そして3. 死にたいする無感覚。これら3つは後の遠藤文学において追求されつづけるテーマとなります。

第Ⅱ段階（相互理解）[1966–1980]：〈1961–1965年 第二バチカン公会議〉

1966年に出版された『沈黙』から1980年に『侍』が出版されるまでの第Ⅱ段階において「神」無き日本における西洋人と日本人の相互理解が模索されます。つまり、キリスト教という宗教を文化背景に持たない日本において、救い主キリストが日本人にどのように提示され得るかという問題意識が表出します。そこで、キリスト教が日本文化に実体化される「キリストのイメージ」が究明されます。遠藤は、その一つの大きな鍵を日本のカクレキリシタンの信仰から見出しています。

『沈黙』は一種の歴史小説でもあり、それぞれの人物は史実に基づいています。物語は、切支丹禁制の厳しい鎖国時代の日本に3人の若いポルトガル司祭が潜入をくわだて、上陸後、捕われ、拷問を加えられ、背教するといういたってシンプルな筋立てです。この3人の司祭たちが、このよう

8 遠藤は、いくつもの短編に、参戦しなかった自身の経験を語り、友人や知人から侮蔑と敵意を感じると綴っている。「役立たず」(1961)、「満潮の時刻」(1965)、「わたしの履歴書」(1989)等。

な絶望的な挑戦にいたった2つの理由は、1. 恩師の棄教という報告の真相を確かめること2. 宣教「日本人の教化と主の栄えの為」⁹でした。途上1人はマカオにて病死し、そこで出会った転び者キチゾーと、ロドリゴ、ガルペの3名が日本に潜り込みます。ロドリゴは絶えずキリストを慕い意識しています。作品中に描かれるイエスの顔はロドリゴの心を映す鏡として機能し、受難の同行となって表れています。この影のように同行しているイエスの顔の変化の課程は、ロドリゴの持つキリストのイメージ（西洋的基督教）が日本的キリストへと実生化されていく象徴でもあります。

遠藤は『沈黙』のクライマックスにおいて、踏み絵のイエスが迫害されている神父の痛みを共に負うという劇的場面を描きます。無力な者、弱い者、苦しむ者と共にある無力なキリストの姿（共苦）は、踏み絵のイエスが語る「踏むがいい」という衝撃的な言葉に集約されます。まさにこの瞬間において、人間の痛みを背負う十字架のイエスが日本の大地に根を張りました。また「踏むがいい」というこの一言において、遠藤は母性的なキリストのイメージを表現しました¹⁰。

『沈黙』という題名から、「神の沈黙」というニヒリスティックな小説という誤解をうけることが少なくありません。しかし『沈黙』は、神は沈黙しているのではないという遠藤周作の信仰・祈りが表現されている作品です。それはもともと遠藤がこの作品のタイトルを『日向の匂い』としていたことから窺うことが出来ます¹¹。神は、歴史の闇に埋葬された「転び者」「背教者」にも語りかけあたたかい光をそそいでいるということです。カトリック内で様々な議論をかもしだし、バッシングをうけても遠藤の文学

9 『沈黙』新潮文庫（1981/1966）18頁。

10 海外において、その翻訳から遠藤の趣旨が伝わっていないのが残念であること
を指摘した。Mase-Hasegawa Emi, *Christ in Japanese Culture*, Brill 2008: p. 99.

11 『沈黙』という題は出版社の意向だったことが明らかにされている。山根道公、
前掲著。

活動、信仰を支えた大きな外的要因は第二バチカン公会議（1962-1965）が示した新しい方針でした。そこでは、17世紀から勧められた宣教方針「教会の拡大、発展のための西洋文化の押し付け」は訂正され、すべての民族の独自性は伝統文化に照らし合わせ適応され受け入れられる（教会の宣教活動に関する教令）と示唆されました。また、教会一致（エキュメニズム）が公言され、地域文化に根ざした典礼の在り方が模索されることが許され、すべての人が聖性に招かれていることが確認されることによって、個人にもイエスを論じる自由が保障されたのです。

『沈黙』出版後、遠藤は1968年から5年間、毎年イスラエルに旅をして聖書を研究しています。その間「聖書物語」の連載を続け、自らイエス像の探求を試みています。そして遠藤は〈事実と真実〉を区別するという視点、つまり史実のイエスと信仰する者にとっての救い主イエス（キリスト）を区別することによって独自のイエス像を展開します。

また、遠藤文学第Ⅱ段階におけるイエス・キリストのイメージは、「置き換え手法」を使って確率されているということは注目すべき点の一つです。遠藤はこの手法を聖書から学んでいます。イエスは地上の権力的王ではなく心の愛の王に変容した、つまり王の意味が変容し新しい価値を与えられ再生したと言います。『沈黙』（日向の匂い）においては、ロドリゴにとっての威厳と栄光に満ちたキリストのイメージは、自分が今まさに踏もうとしている「踏み絵」上の、人間と同様にみじめで疲れ果てて擦り切れたキリストの顔に変容しました。また『侍』（王に会った男）では、侍（長谷倉）は貿易を成立させるという使命を帯びて王に会うために海を渡ります。法王には会えたものの使命を果たすことが叶わなかった侍は、長旅において地上の王ではなく、別次元のみじめなメシア（王）であるキリストに心ひかれていきます。そして、現実上挫折した自分とイエスを重ねることによって、自分の死に至るまで供として同伴してくれる永遠の同伴者イエスを見出すのです。

こうして確立された遠藤文学におけるイエス・キリストのイメージには確たる根拠がありました。遠藤はこのように記しています。「……神の救いは遠い^{あなた}彼方^{あお}の碧い空にあるのではなく、まさに我々人間の最も俗的なもの、最もよごれたものなかで行われるのだ、という信念がある。」¹²

まとめ（相互理解）：遠藤が第Ⅱ段階において導き出したイエス・キリストは「天の王」「栄光の主」「勝利の主」ではありません。一痛みの中に弱者とともにある（共に苦しみ）・すべてを抱擁する母なるもの・永遠の同伴者です。こうしたイエスのイメージを通して、日本対西洋という相克の構図は相互理解の構図へと歩み寄ることが可能となりました。遠藤は、「聖なるものを表現することは小説家にはできぬ。私はイエスの人間的生涯の表面に触れたにすぎぬ」と、謙虚な姿勢を示しています。しかし私はここに、欧米の観念的な伝統神学の枠組みを超えそれを脱構築する遠藤の秘められた神学的姿勢を見るのです。

第Ⅲ段階（統合）[1981-1993]：〈入院、宗教多元主義との出会い〉

『侍』を書き終えた遠藤は悪の問題に取り掛かります¹³。フランス留学時代に学んだキリスト教文学（モーリヤックやグリーン）において、遠藤は西欧の深層心理学からの影響を受けています。心は意識と無意識の2に分けられるものであり、キリスト教文学に描かれる無意識は暗く混沌とした領域でした。そして無意識は、罪の母体、罪の根源として捉えられました。だからこそ、無意識は闇の世界として文学のテーマになりえたのです。

しかし遠藤は第Ⅲ段階において、その闇の世界にも積極性を与えることに成功しています。闇の世界であれ救いの光は求められ注がれる。これは

12 CSEL, vol. 14所収, 「私の愛した小説」(1983) 48頁参照。

13 同上, 123頁参照。

遠藤がキリスト教の悪の問題に対して、仏教（唯識論）の説く人間の無意識を積極的に解釈し彼の文学に取り入れた結果でした。仏教において無意識は一つではなくマナ識とアーラヤ識に分けられます。マナ識は無意識に存在する「我」中心の心、そしてアーラヤ識（溜まり場所）はその奥に存在する執着の源泉を蓄える蔵です。アーラヤ識（溜まり場所）は、前世の経験をもすべてを含む経験の溜まり場と考えられています。遠藤はこのアーラヤ識をみ仏の力が働く救いの場所として捉えてキリスト教的に再解釈します。つまりアーラヤ識こそ人が神を切に求める魂の場所であり、神の愛が秘かに働く領域、恩寵の光りが差し込む場所と解釈するのです。この救いのテーマは遠藤文学の集大成ともいわれる『深い河』（1993）において追及されました。

まとめ（統合）：『深い河』はインドを舞台とします。日本人司祭、大津が日本において一度は拒否したキリスト教を積極的に受容することによって、今度は宣教師となる決意を持って日本を脱し、海外へとばたきます。そして、最後に到達したのがインドでした。もはやそこにおいては日本対西洋、日本人対西洋人という二者対立の構造は超越されており、日本と西洋はグローバルな世界に共に位置する共同体として認識されています。また、第Ⅱ段階に確立されたイエスのイメージ、キリストの人格性は弱められています。聖霊が多元主義的に解釈されます。信仰は聖霊の働きを中心とする靈性（スピリチュアリティ／求道性）の応答として再解釈されているのです。

遠藤氏は最後に自分の棺の中に『沈黙』と『深い河』の2冊をおさめるように指示されたと順子夫人から伺っています。私は氏がどれほどこの2つの作品に思いを込めていたのか理解できるように思います。残された時間において遠藤が展開した「神」概念（キリストのイメージ）が『深い河』でどのように展開、表現され人々の心に伝えられたかを考察します。

配布資料の説明

資料1：『『深い河』創作日記』¹⁴（以下「日記」）からの抜粋。「日記」は遠藤氏の死後、発見されました。1990年に始まり1993年の入院、腎臓手術まで記されています。そこには執筆中の日常や、小説の紆余曲折などがつづられており、「この小説が私の代表作になるかどうか、自信が薄くなってきた。しかし、この小説の中には私の大部分が挿入されていることは確かだ(92.8.18)」と記されています。また老いと病と戦いながら『深い河』を代表作とすべく辛く苦しい執筆活動を続けていたことがわかります(90.7.30)。

資料2：『『深い河』をさぐる』¹⁵（以下「探る」）からの抜粋。「探る」は『深い河』の出版後1997年に文芸春秋から出版されました。ここには1986年から1994年まで、つまり『深い河』の創作準備段階から創作後まで行われた各方面からの専門家との対談が収められており、遠藤が『深い河』を創作する際に数々のヒントを対談から得たことがわかります。

資料3：は『深い河』¹⁶からの抜粋です。

資料4：『宗教多元主義を学ぶ人のために』¹⁷に掲載された一部（240頁）のコピーです。

これらの資料を手がかりに『深い河』に託された宗教的視点を解釈していきます。

14 CSEL, vol. 15所収。

15 文春文庫（1997）から引用。

16 講談社文庫（1993）から引用。

17 間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社（2008）所収、長谷川（間瀬）恵美「愛と救済—遠藤周作『深い河』—」227-244頁。

『深い河』—遠藤文学の総決算^[4]

*タイトル：『河』→『深い河』

『河』というタイトルが『深い河』に変更されたのは、初校が組み上がった後だということが「日記」(1992.11.9)に記されています。黒人霊歌(Black Spiritual)は奴隷の賛美歌です。奴隷として米国に連れてこられた黒人たちは、白人によって「牛」のように働かされ、人種差別の中苦しみ、悩み、その孤独と悲哀を歌に託してきました。過酷な日々を送る中それでも希望をもって生きようとした彼等の信仰、その祈りが遠藤の最後の小説の題名になりました。黒人霊歌の一節は本の内カバーに記されました。

キリスト教において、「川」はバプテスマ・洗礼、つまり古い自分が死に新たに生れ変わる再生のシンボルを表します。遠藤のメッセージはそのタイトルにも示されています。

*主人公：磯辺、美津子、沼田、木口、大津、三條、江波。それぞれの主人公に、様々なテーマが託されています。

(ア) 亡き妻の生まれ変わりを探す磯辺。アニミズム、夫婦愛、共時性、前世の記憶、仏教的死生観等現代倫理の諸問題が提示されます。磯辺の妻は臨終の際、自分の生まれ変わりを探してほしいと磯辺に頼みます。遠藤は仏教語の「輪廻転生」でもキリスト教の「復活」でもない「生れ変わり」という言葉を使っています。それは万人の「救済」という問題に関係します。

(イ) 真似事ではない愛を求める美津子は戦後生まれで物質的には裕福だが精神的なものを渴望しています。美津子において形而上学的問いが追求されていきます。

(ウ) 童話作家沼田。遠藤自身の実体験の多くが導入されています。環境問題と宗教が問われます。

(エ) 戦中派の男性 木口。木口とその友において友愛とは何か、また罪

とは何かが提示されます。

(オ) 実直な神父になれないキリスト教徒大津¹⁸。大津においてキリスト教の実生化、異端論、多元主義的キリスト教、信仰論、信仰の実践(Orthopraxis)が提示されます。

(カ) 新婚のカメラマン三條は利己主義、エゴイズム、欺瞞的正義を象徴します。

(キ) インドツアーの添乗員江波。彼によって主人公は女神チャームンダー、ガンジス河へ導かれます。江波は遠藤自身であり、遠藤が導き手という解釈も可能です。

主人公の人生背景は各章において平行に語られ、それぞれがインド仏跡旅行に参加します。しかし主人公は最終的にガンジス河のほとりに集められていくのです。添乗員の江波のみならずすべての主人公が遠藤自身の深い分身であり内心の対話(Inner-dialogue)として読み進んでいくことも可能です。

*舞台設定：日本(2章)→インド(6章以後)

今までの遠藤の文学とは異なり舞台はインドに設定されています。ここから遠藤が17世紀の宣教と文化の形体から21世紀の伝道の在り方を模索していることが窺われます。西洋のキリスト教が移植され受容するだけの日本文化から脱し、積極的に実生化したキリストの教えを海外へ伝道していく姿です。インドという舞台において日本と西洋はグローバルな世界に共に位置する共同体として認識されます。

*メインテーマ：神の恩寵(救済・希望)。主人公は失われた愛を求めて、それぞれの人生の苦悩(罪や悪を超えて人間は救済されるのか、何を

18 主人公大津は、遠藤の生涯の友人であった井上神父がモデルといわれる。しかし井上神父本人は否定している。私自身、大津もまた他の主人公と同様に遠藤の分身として解釈している。

希望しうるかという問い)を抱えてインドへ旅に出ます。ガンジス河のほとりに集められた主人公に与えられた神の恩寵については最後に戻ります。

*サブテーマ：遠藤は第Ⅰ段階に発表した「私とキリスト教」(1963年)において、自分の信仰の問題として日本人的な感覚と基督教との矛盾を3つ記しました(本稿p.⑥参照)。この3つが『深い河』のサブテーマとなっていることが『深い河』は遠藤文学の総決算といわれる所以だと考えています。

◎罪(悪) 原罪論と救済論

◎死(復活/輪廻転生) 一生まれ変わり

◎神(母なるもの←ガンジス河←チャームンダー←イエス) 神論における神の受苦と愛

以下、サブテーマの一つ「神」について焦点を当てます。

『深い河』における宗教的視点^[4.3]

『深い河』の中の「キリスト」

遠藤の文学はキリスト教の思想と道徳に立脚しておりイメージやルートメタファーを通して紹介されてきました。『深い河』においてもキリスト(救い主)は3つのイメージで扱われています¹⁹。

A. 苦難の僕イザヤ書53章 → 苦難の僕(ピエロ)

B. 同伴者イエス → お遍路

C. 母なるイエス → 女神チャームンダー

19 長谷川(間瀬)恵美, 前掲書, 231-234頁参照。発表日にはまだ出版されていなかったためその箇所をコピーしてA・B・Cを説明。

母なるもの

『深い河』においてキリストのメタファーとして描かれたA. 苦難の僕B. 同伴者C. 母なるイエス、は母なるガンジス河において統括されます。

遠藤はヒンドゥー教の女神チャームンダーをキリストのアナロジーとして登場させました。チャームンダーは「女神」というステレオタイプ的なイメージを覆します。一般に、現世における利益や美的生活を享受することを望む日本人は美しく、豊満なイメージを伴ったヒンドゥーの女神を実生化してきました。例えば、ヴィシュヌの妃で美を司るラクシュミーは吉祥天女として、また美術の神サラスヴァティーは弁天様として親しまれています。本来のインドで尊敬されている戦いの女神ドゥルガーや殺戮の女神カーリー、大地母神チャームンダーは親しまれてきませんでした。

しかし遠藤は、まさにその大地母神チャームンダーを作品に登場させ、美津子にその姿を「現世の苦しみに喘ぐ東洋の母」と言わせませす。母は自己を犠牲にしても子を憐れみ、慈しみ、受け入れる、愛のシンボルです。自己犠牲はキリスト教の根本的な教えです。それは相手を思う心によって自分が「無」とされることです。「忘己利他」という仏教の教えは「利他忘己」と転換されます。イエス・キリストは短い人生において自己犠牲の愛を示しました。また、女という性を担った聖母マリア、女神チャームンダーは、社会的に弱い立場、辺境におかれた (marginalized) 存在でした。その中で、子どもらに自らの命を絞り切るほどの愛を注ぎ心の底からの苦しみと悲しみを生きることで、子どもらの苦しみと悲しみをも共に負う同伴者でいたのです。『深い河』において示された神の愛は、その苦しみあえぐ母なる神を信頼し、その愛に委ねて生きる大津の信仰を導き、抱擁したのです。

宗教多元主義^[4.3.1]

美津子はチャームンダーに聖書の「苦難の僕」を想い、大津の生き方を

重ねます。大津は美津子に棄てられた後神父になるためフランスのリヨンに渡ります。しかし大津の信仰は、伝統的キリスト教の絶対性を唱える西洋世界においては汎神論的で異端的な信仰として拒絶され、排除され続けました。紆余曲折した人生をたどった末に大津は、いかなる時もイエスは「母なる愛」をもって、自分に同伴してくれているという確信にたどり着きます。捨て犬同然だった大津はインドでヒンドゥーのサードゥーたちに受け入れられ、ただひたすらイエス・キリストに従い、瀕死の行き倒れたアウト・カーストたちを背負ってガンジス川まで運ぶのです。それは大津にとってイエスが背に十字架を背負いゴルゴダの丘を登った真似事です。その善行は神に応答する実践的信仰として理解することができます。大津は母なる河、愛の河へと人々の悲しみを運び届け続けました。大津の信仰の到達点は「祈り」とも受け止められる言葉に表されています。

「……玉ねぎがヨーロッパの基督教だけでなくヒンズー教のなかにも、仏教のなかにも、生きておられると思うからです。思っただけでなく、そのような生き方を選んだからです。」

さてここで資料1「日記」(1991.9.5)をご覧ください。遠藤はジョン・ヒックの提唱する宗教多元主義に非常に影響を受けたと書いています。ヒックは現代イギリスを代表するキリスト教の神学者・宗教哲学者です。イギリスはキリスト教を国教とするキリスト教国です。しかし移民の受け入れなどによりユダヤ、ムスリム、シーク、ヒンズーなど他宗教の信徒がコミュニティを作りそれぞれ生活を始めています。そこでヒックは、キリスト教が絶対性を保持し続けることは社会の現状から見てもはや許されないことであると1960年代に逸早くその現実を認知しました。ヒックはキリスト教徒(長老派)である独自の立場を保ちつつ、他宗教との共生の道を求め続けキリスト教の絶対性(キリスト中心)を脱する必要性を説きつづけました。そしてヒックは宗教の多元性が存在するという現象をもとに、どの宗教にも働いている究極的実在を中心とした宗教理解のための理論モ

デルを提唱したのです。これが「宗教多元主義」といわれる仮説です。究極的実在 (the Real) はどの偉大な宗教伝統においても人格的に、あるいは非人格的に捉えられます。ヒックはその実在者を「無」(fullness) と考えることにも賛同を示します。実在者に対する人間の応答にはさまざまな形態が認められどの形態においても「自我中心から実在中心への人間存在の変革」が生じており諸々の宗教伝統はどれも人々がそこに「救い／開放／悟り／完成」を見出すことが出来る救済の道、救済の場だと主張します。

大津が倣うイエスの生き方は利他忘己（自己犠牲的）な生き方です。またそれは、自分の信仰を主張せず、強要せず、他宗教の信徒とともによごれたアチャラを着て、行き倒れの人々の望むとおりに母なる河へ運び続ける実直な実践的姿です。宗教多元主義は神がすべての宗教において働きを示していることを信じ、万人の救済を仮説とします。神は存在でなく「働き」つまり聖化する実在として理解されます。そして宗教的権威主義の諸形態、つまり特別な啓示を最高の真理とする聖書主義、教会主義、儀礼主義、秘跡中心主義を否定するのです。

ヒックの「神は多くの名前を持つ」という主張を遠藤は大津の言葉において、咀嚼しています。「その（神という）言葉が嫌なら、他の名に変えてもいいんです。トマトでもいい、玉ねぎでもいい」「神は色々な顔をもっておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者の中にも神はおられると思います」と主張します。そして大津の信頼する神は、「玉ねぎという愛の河はどんな醜い人間もどんなよごれた人間もすべて拒まず受け入れて流れる」のです。

遠藤がヒックの提唱する宗教多元主義から多少なりとも影響を受けたということは事実です。しかしそれ以上に遠藤はヒックの宗教多元主義に出合うことによって、西洋にも自分と同時代に観念的な伝統神学と葛藤してきた人物が存在することを知りまたそれを宗教哲学者として継承する、慶

応の後輩間瀬啓允に出会うことによってようやく孤立無援の状態から解放され創作意欲がかきたてられ『深い河』が完成されたと考える方が適切でしょう。なぜならば遠藤は『深い河』においても『沈黙』と同様、内的宗教対話（Inner-religious dialogue）の姿勢を維持し続けているからです。

諸宗教間対話^[4.3]

『深い河』において日本人の一行は仏教の発祥地を巡るツアーに参加するのですが、主人公らにはその目的は達成されず、むしろガンジス川が最終目的地となります。登場人物一人一人が物語るように誰もがスピリチュアルなニーズを感じているのにそれぞれの間で「心を開いて」その宗教意識を語り合う場面はありません。彼らは母なる河に包まれ癒されます。しかし、お互いを十分に理解することなく独自の世界へと帰国するのです。つまり『深い河』にはヒックの宗教多元主義が追求する諸宗教間の対話（Inter-religious dialogue）〈お互いの信仰をとことん話し合い、理解しあおうとする共生の態度〉が希薄なのです。もう一度「日記」をご覧ください（1991.10.7）。

ヒックの理解者である間瀬啓允教授は、個人の宗教体験を否定しません。しかしその体験が言語化されない限り、その体験はどこまでも個人のものであって他の個人とは共有されることがないと主張します。言語化された信仰の客観性を大事にする立場です（批判的実在論 critical realism）。ですから、神秘的主義的傾向を持つ門脇佳吉神父は素朴実在論（naïve realism）と相容れないのは当然であります。

遠藤は創作準備中にヒックから思想的影響を受けながらも日本文化に通底する日本人のナイーブな信仰の立場との中間に立たされ当惑していま

す²⁰。呆然と佇む遠藤の心境が作品に反映されているのが印象的です。「河を見つめながら木口は暗唱している阿弥陀経の一節を唱えはじめた。水が流れていく。ゆるやかなカーブを描きながら南から北へ、ガンジス河は動いていく。……阿弥陀経を唱える木口のそばで、少女が黒い大きな眼で身じろぎもせず彼を見つめ、離れなかった。」登場人物の1人である木口がこのガンジス川のほとりに立ち「河を見つめながら」戦死した友と戦友のために阿弥陀経を唱えます。その気持ちを理解して同席しても良いはずの美津子はその場を離れます。それでも遠藤は「母なるもの」を展開するに際しては、宗教多元主義の理論モデルに忠実でした^[4.3.2]。「神の愛」のシンボルであるガンジス河は人種、老若男女、聖も醜も、貧富の差や宗教の違いも、全てを受け入れ流れていきます。

また、インド人の女の子でしょうか「少女が黒い大きな眼で身じろぎもせず彼を見つめ」木口から離れようとしません。木口の仏教徒としての法要の意図は少女には理解されていません。同じ場においても、その宗教体験は共有されていないのです。しかし少女と木口が見つめる方向は同じです。このことから遠藤が意図したことは、見つめるその先にあることのできない大海、つまり究極リアリティへと実は木口と少女の2人の異なる信仰が相通じていたということです。

神の恩寵

遠藤は自分の文学の集大成として残した『深い河』において西洋の「神」概念を脱構築しました。大津の言葉を通じて「神（イエス）は愛、命のぬ

20 私たち日本人には神仏の存在など証明しようという理屈はないからである。日本人には神仏の働きを感じるか、感じないかのほうが問題であり、しかもこの働きをどこで感ずるかが大事なのだ。今私にまがいなりに宗教につながっているのは、自分を超えたもののひそかな働きを自分の半生に実感として感じてきたからである。CSEL, vol. 14所収、「私の愛した小説」（1983）22頁。

くもり、もしくはトマトでもタマネギと呼んでもいい」といいました。神は「人間のなかにあって、しかも人間を包み、樹を包み、草花をも包む、あの大きな命」そして「それしか…この世界で信じられるものがあります」と、神を「それ」という人格とも非人格とも捉えがたい形で語ります。そして河は大海に通じると表現することによって、神を究極的实在のシンボルとして捉えたのです。

遠藤の文学には随時メタファーが提示されています。最後に作品に導入されたメタファーを一部解説することによって作品のメインテーマである「神の恩寵」を判読して終わります²¹。

終わりに

草木も人も動物も、皆等しく尊い「命」があたえられていて「大きな命」に繋がっています。すべての存在の背後に「大きな命」が存在することを意識し、その「大きな命」に身を委ねてその懐に自分の存在根拠を見出すときに人は安らぎを得ることができるのかもしれませんが。そこには人種、老若男女、美も醜も、貧富の差や宗教の違いも、文化や国家を隔てる壁も存在しません。遠藤はそれを受容することが既存の宗教の枠組みを超越した「救い」宗教の根本であると理解していたのだと思います。

神は存在ではなく働きである、人はその働きによって生かされている、これがキリスト者遠藤周作の文学から私が受け継いだ宗教的視点、メッセージです。

21 長谷川（間瀬）恵美，前掲書，240-241頁。（資料4を説明した）

レジュメ

1.はじめに-宗教と文学

宗教→キリスト教→日本的キリスト教=カトリック信徒の遠藤周作の解釈←JELCの信徒であるEMHが再解釈
文学←遠藤周作の作品←文学活動に反映する作者の信仰をEMHが探る

1.1 実生化^{みしょうか}-キリスト教が異文化に移植されること Inculturation. 通常、文化内開花、異文化内開花と邦訳されるが、もしくはカタカナでそのままインカルチュレーションと表記されるが、私はこれに対して「実生化」という言葉を提唱する。実生とは小さな芽生えのことで、草木はその土地に種を根付かせ、しっかりとその土地の大地に根を張り、実を結ぶ。これは「実生の桜」「実生のくちなし」と呼ばれる。キリスト教の宣教は、すぐれて文化における実生化を目的とする私は信じるので、日本における「キリスト教の実生化」とよぶ。遠藤周作は、文学においてキリスト教の実生化を目指したと考える。

2.遠藤周作 (1923-1996) について

3.遠藤文学におけるキリスト教の実生化とその展開過程

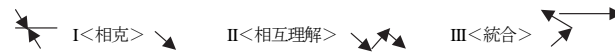
第I段階 (相剋) [1947-1965]: 「われわれ (日本人) は 多くの神 (汎神論) の息子です」

第II段階 (相互理解) [1966-1980]: 「痛みの中に弱者とともにある (共苦)」 「ありのままを受け入れる母」 「永遠の同伴者」 イエス

第III段階 (統合) [1981-1993]: 多元主義的に三位一体を解釈

.....1947 → 1966 → 1980 → 1993.....1996
「神々と神と」 『沈黙』 (日向の匂い) 『侍』 (王に会った男) 『深い河』
I II III

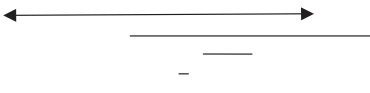
宗教と文化



4. 『深い河』 — 遠藤文学の総決算

4.1 『深い河』 創作活動

1986年 90 91 92 93 94 95 96



対談『深い河を探る』(資料2)
『深い河 創作日記』(資料1)
『深い河』(資料3)
「宗教多元主義」との出会い (資1,1991年)

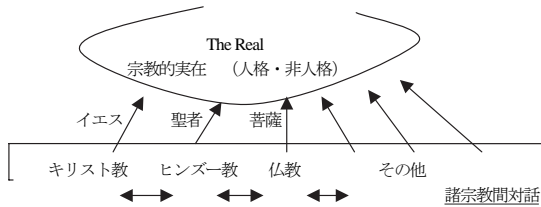
4.2 『深い河』 — 遠藤文学の総決算

タイトル: 『河』→『深い河』
主人公: ア磯辺、イ美津子、ウ沼田、エ木口、オ大津、カ三條、キ江波
舞台設定: 日本→インド
メインテーマ: 神の恩寵 - 救済、希望
サブテーマ: 罪:(原罪と救済)
死:(復活/輪廻転生-生れ変わり)
神:(母なるもの←ガンジス河←チャームンダー←イエス)

4.3 『深い河』^{ディープリバー}における宗教的視点

宗教多元主義
諸宗教間対話
神の恩寵—メタファーから解読する

4.3.1 John Hick's Religious Pluralism (ジョン・ヒックの宗教多元主義)



4.3.2 『深い河』にみる宗教多元主義の理論モデル

